

# Heart × Land 02

こころ宿る地で

なぜか魅せられてしまう、  
そして離れられなくなる……。  
人のこころにそっと宿る土地がある。  
その地で人は創作にはげみ、癒される。  
自分だけのLandに生きる人の声に  
耳を傾けてみる――。

作家 *Isaka Kotaro*  
**伊坂幸太郎**

@宮城県仙台市



## 物語にちょうどいい速さの街。

地方在住の作家は珍しくはない。  
東京の喧騒を嫌って地方に出た者もいる。  
気鋭の若手作家がこの街を選んだのは、  
じつはたんなる偶然だった。けれど、  
ひとり自分を見つめる時間が、彼の作品に  
絶妙の個性と味わいを授けてくれた。  
杜の都、仙台。ちょうどいい速さの街。

Text: Akira Yokota Photograph: Yukio Yoshinari

✳️ 作家になりたいというよりも  
ひとりで小説に専念してみたかった

低迷が言われる文学の世界で、最近若手の台頭が目立つ。若者の風俗を描いた『池袋ウエストゲートパーク』の石田衣良、純愛ブームを巻き起こした『世界の中心で、愛をさけぶ』の片山恭一といった作家の名は、日頃小説にあまり接することのない方もご存じだろう。アクションものなら『終戦のローレライ』『亡国のイージス』などの作品が相次いで映画化される福井晴敏も注目されている。さまざまなジャンルで新世代の作家が、幅広い読者層を掘り起こしているのである。

そうしたムーブメントに少しでも関心があるのなら、伊坂幸太郎という名前も、この際覚えておいた方がいいかもしれない。04年に『アヒルと鴨のコインロッカー』で吉川英治文学新人賞を、『死神の精度』で日本推理作家協会賞短編賞をダブル受賞した、気鋭の若手だ。1971年生まれ、33歳。仙台市青葉区在住である。

作家になるのに条件はない。いくつでもなれるし、どこに住んでいても、誰にでもなれる。ただし、なろうと思わない人ははきってなれない職業だ。未来を予言する案山子が殺されるという奇想天外な小説『オーデュボンの祈り』で00年にデビューした伊坂さんも、高校時代から作家を志していた。本人の言葉を借りれば「作家になりたいというよりも、ただ小説を書きたい、と思っていたんです」という。それを実現させてくれたのが仙台の街。「親元を離れて小説に専念してみたい」と東北大学に



マスターがひとり切り盛りしている小さな喫茶店から大手チェーン店まで、よく行くお店は市内に数カ所点在。「自宅では仕事をしている感じがなくて」と、あえて外出するという。

入学していなかったなら、伊坂幸太郎という作家はこの世に生まれなかったかもしれないのである。

伊坂さんの出身地は千葉県松戸市。典型的な東京のベッドタウンで、高校までを過ごした。小説を書きたかった、と語る言葉とは裏腹に「毎日友達と遊ぶのが楽しくて、書く、という

ひとりきりでの作業なんてできるのかな、と思ってましたね」というごく普通の高校生活。読書は好きだったが、松戸時代には、作品を書いたことはなかったという。大学は地方に進み、ひとり暮らしで好きなだけ小説を書く、という目論見も、おそらく漠然としたイメージだったに違いない。

そんな彼が東北大学法学部を進学先に選んだのは、「友人の中に東北大学を受ける奴がいて『仙台は東北美人もいるし、酒もうまいぞ』とそそのかされたんです(笑)。高校までは自転車で通学していたし、今さら東京の大学に電車で通うのもめんどくさいな、と」。

若者らしい(!?) シンプルな動機で、彼は東北新幹線に乗った。「新幹線で実家から2時間というのもちょうどよかった。新幹線がなかったら、この街には来なかったかもしれないですね」。新星はときに、じつに単純な偶然で生まれるのである。

### ✳️ マイペースの小説修行の 背中を押してくれた街

さて、念願のひとり暮らしを始めた伊坂さんだが、最初からバリバリと作品を書き出したわけではない。大学一年生の時は、まず、他の作家の作品をせっせと書き写すことから始めたという。

「何かで『文章上達のためには、小説を書き写すのがいい』というのを読んだんです。僕には、面倒を省いておいしいところを手に入れちゃいけないんじゃないか、というこだわりがあって。ピカソだって最初から抽象画を描いたわけじゃない。ちゃんとした基礎があってこそ、ああいう絵を描いていいんじゃないか、みたいな気持ちがあるんですよ」

生真面目というか、律儀というか。ちなみに文学部ではなく、法学部を選んだのも「小説を書きたいから文学部、というのは安直だろう、と思ったんです」。

そんな伊坂さんのキャラクターは、作品にも反映されている。彼の作中の登場人物は、破天荒でありながらどこか生真面目で、一本気なところが魅力になっているのである。

高校時代は友達と遊ぶのに忙しかった伊坂さんだが、いざ仙台で小説修行を始めてみると、意外なことにコツコツとひとり作業するのも嫌いではないことが分かった。大学二年になると、いよいよ創作に取りかかる。ただし、小説を書いていることは周囲には内緒。

「小説は自己顕示のためでなく、ただ書きたいから書いてるだけ。だからあえて言わなかったし、友達が急に部屋を訪ねてくると『ちょっと待って』とドアの前で待たせて、慌てて書きかけの原稿をロフトに放り込

むんです。その友達はずっと、成人誌を隠してるんだと思ってたみたいですね」と笑う。

そんな暮らしに、仙台はちょうどいい街だったという。

「中心部は東京と同じでなんでもある一方で、ちょっと街を外れば自然もあるし、どこかのんびりしている。地元の人の中には刺激がない、という人もいますが、僕にとってはそれもよかったです。すっかり気に入って、卒業のときも、今さら東京で満員電車で揺られるのもなんだしな、とこちらの企業を就職先を選んだんです」

入社したのは地元の小さなソフト会社。これも彼にとっては追い風になった。企業向けソフトのシステムエンジニアとして、持ち前の生真面目さを発揮した彼は、だんだんと会社からも責任のある仕事を任せられるようになるが、忙しくなるにつれ、小説を書いていることをうしろめたく感じるようになった。そこで「じつは……」と作家を志していることを会長に打ち明けると「それなら食えるようになるまでウチで働けばいい。応援するよ」と励まされたのだ。

東京の大企業に勤めていたら、とてもそんなわがままは通らなかつただろう。かくして彼は、理想的な環境で小説を書き続けられることになったのである。

### ✳️ ちょうどいい街の速さが 作品の行間から流れ出す

そんな恵まれた場を与えてくれた会社を02年に辞め、作家専業となった伊坂さんの日常は、相変わらずマイペースだ。朝、出勤される奥様と共にノートパソコンを携えて出かけ、お気に入りの喫茶店や公園のベンチで執筆。午前中に400字詰め原稿用紙換算で6枚、午後は別の作品を同様に6枚が日課だ。週末は夫婦でゆっくり過ごすから、おおむね月に200枚あまりを書きあげることになる。夜型が多い作家の中では異例なほど健康的な仕事ぶりも、東京と比べたらずっと静かで刺激も少ない地方都市ならではのかもしれない。もっとも、本人によれば「高校時代から『作家って、こうなんだろうな』と思っていた姿に、最近ようやくなっているところなんですけどね」という。

00年の第一作以来、すでに単行本は7冊。ベテランの有名作家でも初版部数が減ることもあるという昨今にあって、彼の作品は少しずつ初版



伊坂さんお気に入り仙台市内の風景。大橋から広瀬川を臨む。



が増えてきたという。ほとんどの作品が重版され、立派な人気作家である。が、「売れてるという実感は今でもないんです」と伊坂さんは困ったように言う。

「パソコンで自分の名前を検索してみると1万件も出てきて、ああ、と思うけれど、恐い気持ちもある。だって、急に上がったものは、急に下がるじゃないですか。ブームみたいに爆発的に売れるより、ずっと続けられればいいのに、売れないでください、とも言えないし……」。あくまでも生真面目。そしてマイペースなのである。

東京にいたのなら、また違った気持ちになったかもしれない。よくも悪くも情報が豊富で、同業者も多い東京では、したくもないつきあいもあるし、ヤマツギを刺激されることもあるだろう。しかし、伊坂さんは文壇でうまく立ち回り、売れっ子としてチャホヤされたいわけではない。

「今でも広瀬川の河原でポーッと川面を見ていると『ああ、僕は小説を書きたいだけなんだな』と思えるんです。仙台の街の速度が、僕にとってはちょうどいいのかもしれません。僕の作品の呼吸とか台詞のテンポも、仙台だからこそなんだな、と思うんです」

確かに伊坂さんの作品には、たびたび仙台の街が登場する。けれどもそれ以上に、この街のちょうどいい速度が行間から<sup>にじ</sup>しみ出し、読者の共感と呼んでいることは間違いなさそうだ。都会的でありながら、なんとなくのどか。生真面目なのにどこか型破り。伊坂作品の魅力は、作家と彼の住む街のコラボレーションの賜物なのかもしれない。

## profile

伊坂幸太郎（いさか こうたろう） 1971年千葉県生まれ 作家。00年『オーデュボンの折り』で第5回新潮ミステリー倶楽部賞を受賞してデビュー。04年『アヒルと鴨のコインロッカー』で第25回吉川英治文学新人賞、『死神の精度』で第57回日本推理作家協会賞短編賞を受賞。『重力ピエロ』と『チルドレン』『グラスホッパー』の3作は、直木賞候補ともなった。ミステリー作家と称されるが、謎解きやサスペンスより、登場人物の造形や軽妙な会話が魅力の、注目の若手作家だ。



『チルドレン』講談社刊「短編集のふりをした長編小説」とは、帯に書かれた伊坂さん自身による書評。



伊坂さんの最新長編『魔王』が掲載されている物語雑誌『エソラ』第1号。講談社より発売中。

取材協力 クレブスキュール カフェ